

誇りを背に 駆ける

優駿の里 浦河の軽種馬産業

馬産地日高の第一歩

現在、約 750 の牧場で、1万3千頭の馬が暮らす日高地方。名実ともに日本一の軽種馬生産地ですが、北海道はもともと、馬のいない地域でした。

日高の地に初めて馬が入ったきっかけは、1789年、国後島で起こったアイヌ蜂起「クナシリ・メナシの戦い」。松前藩が制圧のため、物資輸送用の南部馬（古来から東北地方にいた和種馬）をサハラ（渡島地方の旧砂原町）からエトモ（現在の室蘭市）へ船で輸送し、様似をはじめ、太平洋沿岸の各地に配置したのが始まりと言われています。

現在の生産の主であるサラブレッドなどが入るのは後の時代ですが、日高と馬の深いつながりは、漁業と同様に、開拓以前の江戸時代からという大変に長い歴史を持っています。

「軽種馬」ってどんな馬？

中東原産のアラブ馬や、それを改良してつくられたサラブレッドなどの競走馬・競技馬を指します。速さを追求し、人の手で交配を重ねられたその姿はまさに「走る芸術品」。



ペルシュロン（写真）などの「重種馬」は農耕や荷物運搬のため改良された大型馬で、体重は1トンを超えることも。



大正 14 年 日高種馬牧場正門

浦河に牧場開かれる

東蝦夷地への交易の増加につれ馬の需要が増えたため、江戸幕府は良い牧草地が確保できる元浦川のピシニコタン（東栄地区）に浦河馬牧場を開設。この馬牧は、明治時代に入ると開拓使により民間に払い下げられ、温暖な気候や繁茂していたササなどを活用した積極的な生産が行われて、今日の基礎ができました。

しかし、明治27年に日清戦争が勃発。この戦争で、外国の馬に比べて体の小さい和種馬の輸送能力が弱いことが露呈してしまい、政府は外国産馬を輸入して、日本の馬の改良を図ることとなります。

そして明治40年、西舎村に国営の「日高種馬牧場」が誕生しました。

軽種馬産業が定着

「日高種馬牧場」の開設もあり、大正時代には、この地域の軽種馬生産が定着していきました。

大正12年には旧競馬法が制定されたことで、競走馬の生産熱が急激に高まり、サラブレッドなどの生産頭数が急増しました。

ところが、またも忍び寄る戦争の気配により、日高の牧場は軍用馬の生産拠点に姿を変えていきます。ついに昭和14年には地方競馬、19年には競馬そのものが中止。軽種馬牧場は、生産を優良馬の温存にとどめざるを得ない状況が続きました。

牧場も多種多様

- ・生産牧場…繁殖牝馬を保有し、生まれた仔馬を販売しています。育成部門を設けている場合も。
- ・育成牧場…生産された仔馬を育成・調教しています。
- ・種牡馬の牧場…種馬（オス）を飼養。



大正末期ころ 堺町 服部牧場



「馬の王国」日高が 確立されたわけ

戦後しばらくは日本各地に馬産地が存在しましたが、産業として確立せずに消えていきました。一方、日高は戦前からの伝統を基礎に、獣医・装蹄・輸送などの関係機関が集積したことで、一大産地に。涼しい気候も、皮ふが薄く暑さに弱いサラブレッドには最適でした。

トニアンを、後年の「ヒンドスタン」は五冠馬シンザンなどを産出し、成功。浦河から、日本の競走馬の底上げに貢献しました。

ヒンドスタンの仔は計113もの重賞(大きなレース)を勝利しており、今なお「サンデーサイレンス」に次ぐ2位の記録を保持しています。



昭和12年に輸入された種牡馬「セフト」は二冠馬ボス

浦河で成功した名種牡馬



戦後 競走馬の時代

終戦後、昭和23年に競馬法が改正され、競馬が復活。昭和29年には中央競馬会が設立され、その後競馬ブームが到来しました。

競馬産業の急激な拡大に伴い、軽種馬生産も爆発的に増え、日高支庁管内の農業粗生産額では昭和40年に約20%だった軽種馬の割合が、45年には一挙に60%へ。同時期に米の生産調整(減反)が始まったこともあり、浦河でも多くの水田が牧草地に代わっていきました。

そして近年、バブル経済崩壊後の景気の低迷や、競走馬の輸入増加の影響で厳しい状況であった軽種馬生産ですが、平成27年より地方を含めた競馬・生産馬売上げは回復傾向にあり、明るいきざしを見せています。

苦しい戦時中も歴史ある血統を守ってきた生産者、そして携わるすべての人びとの誇りを背に、浦河の優駿たちはこれからも力強く駆けつけていくでしょう。

馬産地の暮らしが作り出す 「風景」という新たな価値



わたしたちが毎日、何気なく見ている牧場風景。海をのぞむ広大な牧草地で、のんびりと馬たちが草を食んでいる風景は、馬産地として発展してきた浦河での、人びとの暮らしによって形作られてきたものです。

しかし、日本、そして農業王国北海道でも、これだけの軽種馬牧場が広がっている地域はここ日高だけ。浦河への体験移住者や、民泊をした本州の修学旅行生からは、「まるでヨーロッパにいるよう」「都会では絶対に見ることのできない景色に感動した」といった感激の声が寄せられています。

町では、このかけがえのない「日常の風景」を活かし、観光や移住・交流人口の増加に力を入れています。

JRA(日本中央競馬会)の「日高育成牧場」は、国内に浦河町と宮崎市の2ヶ所しかない本格的な競走馬育成総合施設。平成27年、開設50周年を迎え、7月には記念式典が開かれました。競走馬の育成・研究で得た成果やその技術などは生産地へ還元され、今や世界で戦う日本馬のレベルアップに貢献してきた施設です。

その世界最大規模の調教施設を運営しているのがBTC(軽種馬育成調教センター)で、総面積1,500ヘクタールという広大な敷地では、明日の名馬たちが日々鍛錬しています。

また、産地における育成調教の中核となる人材を育てる場所としても、浦河の軽種馬産業を支える存在です。

生産を支える最先端施設 JRA 日高育成牧場・BTC



↑平成27年7月27日に行われた、開設50周年記念式典

→1,000mもの全天候型屋内直線馬場



浦河産の名馬たち

浦河で生まれ、巣立っていった馬たちの中には、競馬の最高レベルのレース「GI」で何度も優勝したり、史上初や未だ破られない大記録を持つ名馬がたくさんいます。

現役時代は全国のファンを熱狂させ、引退後やこの世を去った後ですら、人びとに語り継がれる優駿たち。浦河の誇る名馬の一部を、ここで紹介します。



牡・鹿毛
19戦 15勝
(1963年～1965年)
64年…皐月賞
同年…東京優駿
同年…菊花賞
65年…天皇賞(秋)
同年…有馬記念
など

歴史に燦然と輝く五冠馬

シンザン

松橋吉松生産

「ナタの切れ味」と評された走り、JRAの8大競走のうち5つを勝利し、史上初の五冠馬となった。そのスピードは強い踏込みによって生み出されるため衝撃に耐えられる特殊な形の蹄鉄「シンザン鉄」が製作されたほどだった。引退後は種牡馬となって、ミホシンザン(日進牧場)などを輩出し、36歳という長寿をまっとうした。



牝・鹿毛
中央 32戦 7勝
地方 9戦 9勝
海外 1戦 0勝
(1993年～1997年)
93年…エリザベス女王杯
96年…川崎記念
など

砂上で覚醒 無敵のダート女王

ホクトベガ

酒井牧場生産

芝コースのGI「エリザベス女王杯」で9番人気ながら優勝し、大波乱を演出した後、ダート(砂コース)路線へ転向。直後の「エンプレス杯」で2着馬に18馬身もの差をつけ、衝撃的な圧勝を果たした。その後も各地方の競馬場で快進撃を続け、96年にはダートレース8戦全勝の快挙を達成した。



牡・栗毛
26戦 14勝
(1998年～2001年)
00年…天皇賞(春)
同年…宝塚記念
同年…天皇賞(秋)
同年…ジャパンカップ
同年…有馬記念
など

年間無敗 8連勝の絶対王者

テイエムオペラオー

杵臼牧場生産

ミレニアムに沸いた2000年に年間無敗の8連勝、しかもそのうち5勝は「古馬(4歳以上の馬)中・長距離GIレース」という、前人未到大記録をうち立てた名馬。獲得賞金はなんと18億円を超え、この記録は日本はおろか世界でも未だに破られていない。



牡・芦毛
21戦 12勝
(1990年～1993年)
90年…菊花賞
91年…天皇賞(春)
92年…天皇賞(春)
93年…宝塚記念
など

父子3代で天皇賞制覇

吉田堅生産

メジロマックイーン

祖父のメジロアサマ、父のメジロティターンに続き、春の天皇賞(芝3200m)を3代で制覇したステイヤー(長距離馬)。史上初の天皇賞2年連続優勝も飾っている。また、現在その血は「母の父」として非凡な才能を見せ、オルフェーブル、ゴールドシップなどの活躍馬に受け継がれている。



牡・鹿毛(2012年～)
中央 17戦 5勝
地方 14戦 10勝
海外 2戦 0勝(12月22日現在)
13年…東京大賞典
14年…チャンピオンズカップ
同年…東京大賞典
など

市川ファーム生産

交流GI9勝 最多勝利記録 ホッコータルマエ



牝・鹿毛(2011年～)
中央 27戦 10勝
海外 2戦 0勝
15年…ヴィクトリアマイル
15年…スプリンターズステークス
など

岡本牧場生産

マイル&スプリントウイナー ストレイトガール

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------------|----------------|------------------|----------------|----------------|------------------|------------------|----------------|----------------|-------------|--------------|----------------|------------|------------|-------------|-----------|--------------|---------------|-------------|-----------|
| 平成20 | 平成18 | 平成9 | 平成2 | 昭和58 | 昭和57 | 昭和54 | 昭和51 | 昭和49 | 昭和48 | 昭和47 | 昭和45 | 昭和40 | 昭和39 | 昭和36 | 昭和27 | 昭和23 | 昭和20 | 昭和15 | |
| デイープスカイ(笠松牧場) | メイショウサムソン(林孝輝) | サニーブライアン(村下ファーム) | アイネスフウジン(中村幸蔵) | ミスターシービー(千明牧場) | バンブーアトラス(バンブー牧場) | カツラノハイセイコ(鮫川三千男) | クライムカイザー(田中牧場) | コーネルランサー(大島牧場) | タケホープ(谷川牧場) | ロングエース(岡崎牧場) | ダイシンボルガード(秋場亀) | キーストン(高岸繁) | シンザン(松橋吉松) | ハクシヨウ(酒井牧場) | コダマ(鎌田牧場) | ハクチカラ(ヤシマ牧場) | ポストニアン(ヤシマ牧場) | ミハルオー(富岡牧場) | 浦河産 歴代優勝馬 |

東京優駿(日本ダービー) 浦河産 歴代優勝馬

「優勝はすべてのホースマンの夢」と言われる競馬界最高峰のレース、東京優駿(日本ダービー)。平成27年まで開催された全82回のうち、浦河産馬はダントツ19回の優勝回数を誇っています(2位の新ひだか町と千葉県はともに9回)。

ダービー優勝回数日本一